

まばたきの詩人

信州上田の隣り町坂城で 1984 年2月に 47 才の生涯を閉じた水野源三さんは、小学校4年生9才の時集団赤痢にかかり、高熱による脳膜炎で口も手足も利かない身体になってしまいました。家族ともどもに辛い日々を過していた 12 才のある日、宮尾牧師がパンを買いにきて、聖書を置いて帰っていきました。聖書は ルビがうってあるので、少学校4年までの源三さんでも読めます。

こたつの上に置時計を置き、聖書をたてかけて、こたつにあごをのせ、全身をもたせかけるようにして読んでいきました。その頁を読み終えとお母さんが頁をめくってくれます。「わたしの恵みはあなたに十分である」起床・洗顔・食事・読書 朝から夜までのすべてのことを、自分では出来ない障害の身です。しかし魂が射抜かれる思いに襲われました。そしてすべてのことに意味を見出し、感謝をもって受けとめることが出来るようになったのです。翌年のクリスマスに信者になりました。

歌が心に溢れ始めました。母が「あいうえお」の表を指で指し目の合図で一字一字を拾い上げ、詩が生まれました。信仰誌に投稿して広く読まれるようになり、まばたきの詩人が誕生しました。

戸をかたくしめきっていた部屋に入って来られた  
 キリストにお会いしてから キリストにお会いしてから  
 その両手と脇腹に 傷あとが痛々しい  
 キリストにお会いしてから わたしの心が変わった  
 信じないものにならず、信じなさいと言われた  
 キリストにお会いしてから わたしの心が変わった  
 お会いしてから――

キリストの御愛に触れたその時に 私の心は変りました  
 憎しみも恨みも 霧のように消え去りました  
 キリストの御愛に触れたその時に 私の心は変りました  
 悲しみも不安も 雲のように消え去りました  
 キリストの御愛に触れたその時に 私の心は変りました  
 喜びと希望の朝の光がさして来ました

心はふしぎな所 信じるべきを うたがい 愛するべきを  
 憎み のぞむべきを 落胆し 喜ぶべきを 悲しみ  
 心はふしぎな所 いったん主の御手にふれるならば

見たり きいたり ふれたりしなくても  
信じ 愛し のぞみ 喜ぶことができる

あの日あの時に 戸の外に立ちたもう主イエス様の  
御声をきかなかつたら 戸をあけかなかつたら  
お迎えしかなかつたら 私は今どうなったか  
悲しみのうちにあつて 御救いの喜びを知らなかつた

何がそんなにうれしいの そよ風が甘い香りを運んでくるから？  
いいえ違います 神さまに愛されているから  
何がそんなにうれしいの 泉のそばの鈴蘭の花が咲き匂うから？  
いいえ違います 神さまに愛されているから  
何がそんなにうれしいの 楽しかった過ぎし日を思い出すから？  
いいえ違います 神さまに愛されているから

脳性麻痺となった私のために 父も母も 祖先のたたり  
家の方角が良くない 名前が悪いと いろいろ悩み迷いました  
私がキリストを信じたら 父や母の迷いも晴れ  
ただ信じてくれました

お母さんが晩年にこう語っておられたそうです。「人間としてこれ以上つらい境遇はないと思える生活を続けているのに、源三は家族の中心なのです。いつでも変わらずにここにこして、会う人を迎えています。信仰のなせる業でしょうか」

全国から多くの人が源三さんを訪れ、無言の源三さんの傍らにしばし座り、その笑顔に心を温められて帰っていきました。町の人からも敬愛され「我が町の宝」と言われるようになった由。源三さん 47 才、最後の歌です。

私が生まれる前から 私を知り 私を愛して  
御子イエスを世に遣わした 父なる御神を崇め讃えよ  
私が苦しむ前から 私を知り 私を愛して  
御子イエスを敵に渡した 父なる御神を崇め讃えよ  
私が信じる前から 私を知り 私を愛して  
御子イエスを死に打ち勝たせた 父なる御神を崇め讃えよ

いくたびも ありがとうと 声に出して言いたしと思い  
今日も 暮れゆく